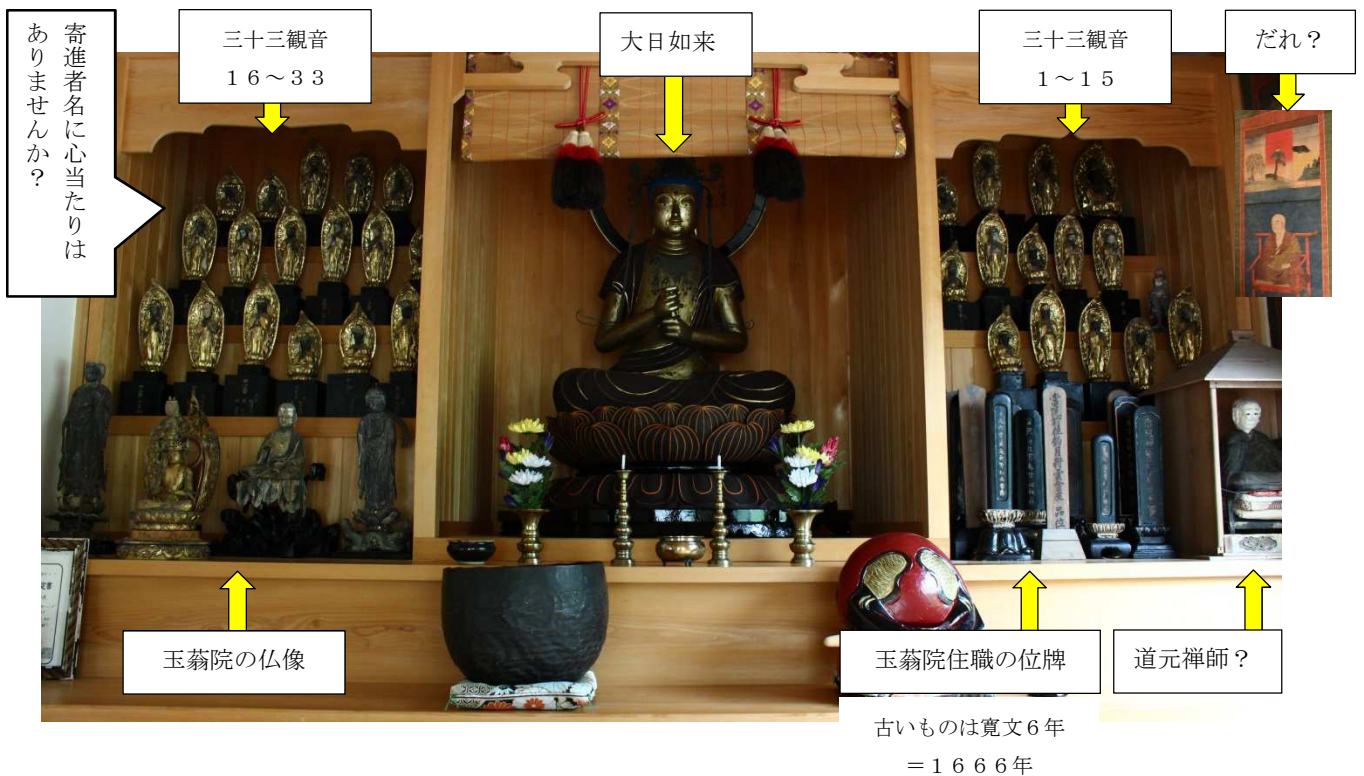
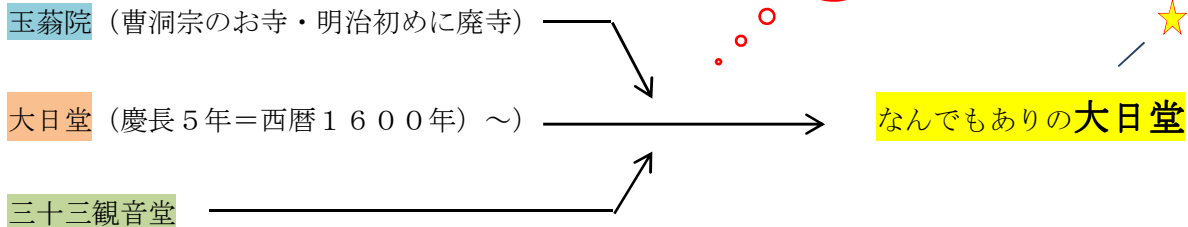


押山大日堂の謎

1、ここは何？お寺？



2、大日堂

①大日堂はいつできた？

16世紀前半 (天文年間)	川手城主の山田主水助景隆が祀る
1600年 (慶長5年)	名主の伊藤弥三郎が新たに造仏
1693年 (元禄6年)	村外れからススベ地区へ移転、大日如来も修復
1743年 (寛保3年)	大雨により堂が大破、4年後再建
1855年 (安政2年)	大水害 (卯年の荒れ) により堂が大破、2年後再建

その後、明治になって現在地に移転。平成16年には老朽化した堂を取り壊し、集会所を兼ねて新築しましたが、このとき大日如来も修復しました。

そのころの全国的大事件は・・・

1600年	関ヶ原の戦い
1615年	大阪夏の陣

②大日如来とは？

宇宙の根本である仏。また「大いなる日輪」という意味もあり宇宙の全てを照らす仏とされています。像は一般の如来と異なった特殊なものです。次項をごらんください。

3、玉菟院

明暦2年（1656年）に龍光院（曹洞宗）の末寺として建立されましたが、明治6年に廃仏毀釈により廃寺となりました。このとき、寺の仏像仏具などは大日堂へ移されました。その一部を紹介します。

①仏像・仏具



澄んだ音・余韻の磬子（けいす）



アグレッシブなお地藏さん



私はだれでしょう？

高い品位の優れた仏像

②この人はだれ？

ところで、大日堂の右側の壁に謎の掛け軸があります。玉菟院のものかと思いましたが、よく見ると曹洞宗を開いた道元禅師ではありません。顔や右手の持ち物（金剛杵＝こんごうしよ）などから空海（弘法大師）と思われます。では空海＝真言宗（本尊は大日如来）だから、もともと大日如来と一緒に大日堂におられたのでしょうか？あるいは、空海は「弘法さま」として真言宗以外でも親しまれ、曹洞宗のお寺でもよく祀られているので、やはり本籍は玉菟院でしょうか？

私はだれかな？



②玉菟院の跡地

現在も熊野神社の下に跡が残っています。下の画像をごらんください。中央に六地藏、両側に住職のお墓が見えます。六地藏は六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の辻で人々を助けてくれるとされています。また、先の尖ったお墓は江戸時代の禅宗に特有のものです。



4、押山観音堂（三十三観音堂）

①そもそも三十三観音とは？

念彼観音力（ねんぴかんのりき）でおなじみの観音経（妙法蓮華経観世音菩薩普門品）では、観世音菩薩はあまねく人々を救うために、時・所・相手に応じて如来・聖者・僧・童子など**三十三の姿に変身**すると説かれています。

これをヒントにして平安時代の終わりごろから近畿地方で一部の宗教者によって**三十三カ所**の観音霊場巡りが始まり、その後武士や庶民にも広まっていきました。

江戸時代になって世の中が安定し、人々の暮らしも豊かになると、霊場巡りは庶民の楽しみとしても人気が出て最盛期を迎えました。同時に、西国に限らず全国各地に霊場が広がっていきました。

明治になると廃仏毀釈で打撃を受け、さらに大戦で荒廃しましたが、戦後の復興と共に復活しました。現在では600くらいのコースがあると言われています。

②押山観音堂はいつできた？

全国各地に霊場が広がると、この地方では小馬寺を中心に稲武・旭・足助にまたがる「**三州加茂郡西国三十四カ所**」の観音霊場ができました。始まった時期は定かではありませんが1700年代の中ごろと思われる。

稲武地区では、四番川手蓮華堂、五番大慈院、**六番押山堂**、七番夏焼観音堂、八番武節一円寺（その後廃寺により桑原龍光院）、九番黒田堂（正寿寺）、十番小田木堂の七か所が札所になりました。

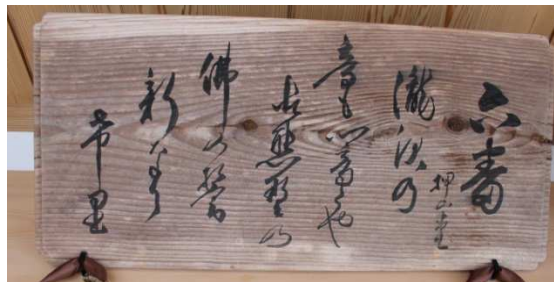
また1850年代には各札所の「御詠歌」がつくられました。

（押山堂の御詠歌）

六番 押山堂

たき沢の 音もひひくやみ熊のの
ほとけのちかい あらた成りける

（稲武町史より）



（三十三観音か？三十四観音か？）

ところでなぜ三州加茂郡西国**三十四カ所**なのでしょう？三十三ヶ所のはずでは？

実はよそこにも三十四ヶ所の例があり、例えば秩父観音霊場などがそうです。

西国**三十三**ヶ所、坂東**三十三**ヶ所、秩父**三十四**ヶ所は日本三大観音霊場と呼ばれています。実は秩父もはじめは三十三ヶ所だったのですが、あわせて九十九観音めぐりよりは**百観音**めぐりの方がキリがいいだろうということで、秩父だけが一ヶ所増やされたのでした。

当地の場合はどういう理由だったのでしょうか？ なお、ここ**押山大日堂内の観音様は三十三体**です。

③三十三観音像を拝観！



観音菩薩の像は大日如来像と類似しています。長髪・冠・胸飾り・腕輪などのアクセサリー・天衣（てんね＝肩や腕に掛ける細長い飾り布）などのやや派手な服装が特徴です。ただし手が智拳印を結ぶことはなく、合掌されているか何かの品物を持っておられます。

左の画像は一番基本的なタイプである聖観音（しょうかんのん）です。ここでは左手に水瓶（すいびょう）を持たれていますが、このように水瓶か蓮のつぼみを持たれることがよくあります。

その横で右足で立膝をついてリラックスされている（？）のは如意輪観音（にょいりんかんのん）です。本来は左右各3本の手（六臂＝ろっぴ）があったと考えられ、ひょっとしたら右手に如意宝珠（あらゆる宝を降らせることができる珠）、左手に法輪（仏法の象徴で歯車みたいな形のもの）を持っておられたのかもしれませんが。

なお、この姿はリラックスではなく、人々を救うための最善の手立てを考えておられる様子だと考えられています。また、安産・良縁などの御利益があるとされ女性に人気がありました。

右は十一面観音で、一般的には頭に10の小顔と阿弥陀如来の顔（合計11の顔）を乗せておられます。

（頭の上は10で、本面との合計で11というカウントのしかたもあります）

あらゆる角度から人々を観察し救済しようというものです。

なお、これらの観音像は全て人々が寄進したものであり、寄進者名がそれぞれの台に記されています。その住所を見ると、御所貝津・川手・武節・稲橋・名倉・小田子・下村など広範にわたっており、この観音堂がグローバル（？）な存在であったことに驚きます。

参考文献 村々に伝わるふるさとの歴史 安藤泰先生
稲武町史 民俗資料編
仏像の見方 澤村忠保
仏像の基本 如来像の見方 エムック 2536
仏像の基本 菩薩像の見方 エムック 2382
目で見る仏像 星山晋也 他
仏像の見分け方 西村公朝